

保護者と学級担任との連携を視点とした連絡帳の活用に関する研究

里 見 達 也
(帝京学園短期大学)

I. はじめに

現在、教育現場では、他機関との連携を大切に進めている。その中で、個別の支援計画を通して他機関との連携を図る上で、教師と子ども・保護者等との間で、教育内容において十分な「説明と同意」が必要になっている。

武蔵・高畑（2003）は、重度知的障害生徒を対象に、問題行動に代替する、より望ましい行動に着目する支援目標をもとに「ほめたよ日記」という支援ツールを用い、学校と家庭双方で記録を取り合うことを実施した。その結果、保護者と担任がお互いに記録を書き合うことで対象生徒の行動についての共通した理解を深め、対象生徒の行動の変化、保護者、担任の対象生徒に対するとらえ方の変化を明らかにすることにより、それに応じた支援手続きを移行することが可能になることが見えてきた。以上のことから、保護者と担任との相互の連携を深める上で、一つの支援ツールを用いてお互い記録したものを見合うことの必要性が明らかになってきた。

中島（2008）は、保育における連絡帳に、育児力を形成する要素があり、読み・書きだけでなく、読み返しによる効果があることを明確化するために、保護者を中心に調査研究を行っている。その結果、連絡帳を読むことについて、保育者の記述内容には高い期待が寄せられ、エピソードに含まれる成長や課題などの記述から、安心感をもったり、励みになったりしている傾向が見えてきた。また返事を書くことについては、読むことに比べ、取り組む意識は低い傾向が見られた。しかし、返事を書くことは自分の考えをまとめ、自分の発見につながっていくことが見えてきた。また、保育者が書いた内容を読み返すことで、自分の成長に気づき、物事を客観的にとらえなおすきっかけになることが確認された。以上のことから、連絡帳によって子どもの日常の生活の様子を伝え合うだけでなく、保育者とのコミュニケーションをスムーズにすることが重要であることも示され、人とのかわりの中で育つ子どもの存在が浮き彫りになってきた。

本研究は、連絡帳を支援ツールの一つととらえ、保護者と担任のやりとりを通して、保護者の意図を汲み取り、学級担任と保護者との意図を確認し合いながら、いかに子どもへの具体的な支援方法を提示し、連携していくかを探っていくものとする。

Ⅱ. 方法

1. 対象学級の様子

(1) 対象学級及び対象児童

筆者が以前勤務していた、医療施設併設の養護学校小学部低学年学級の在籍児童1-3年生の6名。

(2) 教育課程の種類

「下学年適用」及び「知的障害教育代替」の教育課程。

(3) 学級の特徴

- 長期に在籍する児童が少なく、手術・訓練が主な目的での短期間の児童が多いため、転出入が激しい。
- 母子分離がなかなかできていない場合が多い。
- 心障学級，養護学校在籍の児童で，文字・数を意識した学習から遊びをベースとした学習と幅広い。
- 日常的な会話の理解力はあるが，表出が少ない。
- 対先生との関わりはあるが，友だちとの関わりが少ない。
- このクラス単独の授業がほとんどである。

(4) 学級の目標

図1は、「各児童の「個別の指導計画」から中心的な課題を抽出して関連性を整理したものである。

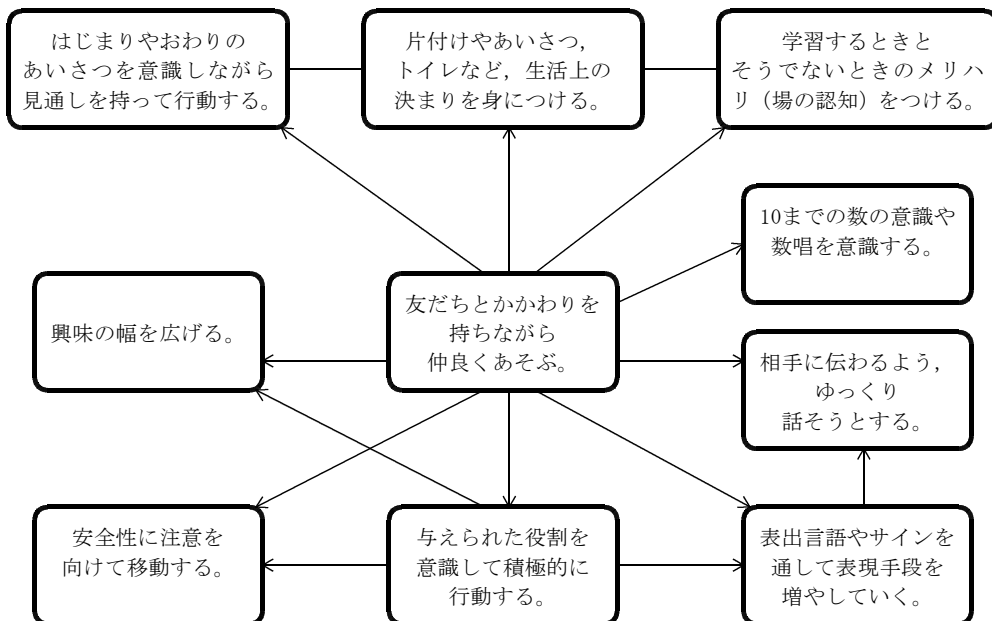


図1 学級の目標

(5) 指導方針

- 親元から離れた特別の環境における児童の心理的安定を図るため、学校にいる楽しさを重要視する。
- 各児童の興味・関心のある事柄から自分でできる課題を設定し、身辺自立の確立とともに自分でできた充実感を大切にする。
- 友だちとの関わりを楽しむ活動を重視するため、「あそび学習」をベースにしながら生活単元的な学習形態で行う。
- 学習意欲の向上を図るため、特に「ことば・かず」を中心に、個別学習を設ける。
- 単独授業が増えるため、他のクラスとの交流を深める目的で他のクラスとの授業の合併も想定して運営する。
- 面談や連絡帳、学級通信等を通して、学校の活動内容や児童の様子を伝えて保護者に対しても安心してもらうように配慮する。

2. 連絡帳でのやりとりについて

ここで取り上げる連絡帳は、保護者とのやりとりを中心に、在籍児童の保護者に向けて、一週間の学習内容やその際の児童の様子、学校からの諸連絡等を報告するものである。週末に配布している。

保護者に外泊時の子どもの様子を伝え、家庭での悩みや学校への質問・要望等を記入してもらい、学級担任へ返却してもらう。学級担任は、保護者からの悩みや質問・要望に対して回答していく。このような作業を繰り返しながら、子どもに対する共通理解を図ろうと試みた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 事例1について

(1) 対象児

Aくん。小学部3年生。脳性まひ。

(2) 対象児の様子

- 右手でコップや積み木を持つことはできるが、口のところに持っていくことや離すことがなかなかできない。
- ブランコ乗りが好きで、上下揺れを好み、支柱を持って自力で動かして楽しむことができる。
- 声量は、比較的小さい。
- 数唱（1-10）はできるが、1対1対応はできていない。
- 「バカヤロ」「そうじゃねえよ」など言葉遣いが比較的悪い。
- 水分補給は、比較的少なく、1回で口に入る量も少ない。

- 時間排尿（1時間おき）であるが、最近「オムツに出た」感触が分かってきたようで、「トイレ行く」と自分から言い出すようになってきている。

(3) 連絡帳でのやりとりの概要

①保護者からの悩み

「家にこもりがちなのが近頃の悩みです。家にいてもビデオばかりですし、気候もよくなってきたので外出をたくさんさせたいのですが、ちっとも応じようとしてくれません。」

②学級担任の回答

『外は気持ちいいよ』と言うと、『好きなテレビ番組みたいから外に出たくない』と応えていました。『じゃあ、その番組は日曜日の夕方にはじまるのだから、そのころまでに帰ってくれば。友だちいっぱいできるし』と話す『うん』とうなずいていましたが……『妹と一緒に外で遊んだら？』の問いには、何かさみしそうな顔をしていたのが印象的でした。妹との関係の中で、本人なりの違和感が、ひょっとしたらあるのかもしれませんがね。私としても、できるだけ『外』の楽しさを、散歩等で伝えていくつもりですので、お互いめげずに、お子さんが外に出て、外でのお子さん側から見た楽しさは何なのかを考えながら誘うようにしていきましょう。」

③保護者からの回答

「外遊びですが、下の子（妹）と外へ出ると、下の子が走り回っているのがうらやましいといっていましたよ。でも、昨日は家の前で2人仲良くおやつを食べていたんですけど。」

④学級担任の回答

「外遊びでは、兄妹の関係の中で、何かあるのかもしれませんがね。兄としての自覚とともに、妹の成長とのほざまで揺れ動いているのかも。」

⑤保護者からの経過報告

「火曜日に突然妹が入院してしまいましたので、そのお見舞いに行きました。妹の元気そうな姿を見て満足していたようです。」

⑥学級担任からの意見

「それは、大変でしたね。妹さんのご様子はいかがですか。お子さんも、突然のことでびっくりしたのではないのでしょうか。でも、この機会は、お子さんにとって妹への感情に変化が見られるかもしれませんね。妹へのいとしさや、お兄ちゃんとしての自覚が、またさらにお子さんを成長させていくものです。妹さんが早く元気になるとよいですね。」

⑦保護者からの経過報告

「夕方、気が向いたのか『外へ行こう』と言うので、下の子と一緒に近所の子どもたちと遊びました。」

⑧学級担任の回答

「だんだん、『外』の楽しさや友だちと遊ぶ楽しさが分かってきたのではないのでしょうか。学校でも、下級生の子には、やさしく声をかけて一緒に遊ぶ姿が見られますよ。これからも、温かく見守っていきましょうね。」

(4) 考察

この事例は、保護者から対象児を外で遊ぶようにするための相談を受けたケースである。これに対して、学級担任は、外で遊ばない理由を聞いた上で、外で遊ぶ楽しさを伝えた。そして、一人で遊ぶより他の人と一緒に遊ぶ環境を想定して、まずは妹と一緒に外で遊ぶことを提案するが、その過程で兄妹関係のぎこちなさが見えてきた。そこで学級担任は、まずは妹との関係づくりが大切であると判断し、保護者に兄妹関係の様子を観察してみるよう提案している。保護者は兄妹関係を観察しながら、対象児が妹の入院をきっかけに妹の存在を意識しはじめたことに気づいたようである。最終的には対象児が「外へ行こう」と言い、妹や近所の子どもたちと遊ぶ様子が観察されている。

一連の経過をみると、保護者の「外で遊ばせるためにはどうしたらよいか」との相談に対して、学級担任は対象児と話をしていく過程から兄妹関係の観察を保護者に提案している。これは対象児が妹の外遊びをうらやましく感じながらもなかなか一緒に入れないジレンマを抱えていると考えたためと思われる。保護者も、学級担任から提案された意図を察し、兄妹関係を観察していくことで、妹の入院に対する対象児の反応などの変化に気づいたと思われる。結果として兄妹関係の深まりをきっかけとして対象児自ら「外で遊ぶ」と言い出す行為につながったと考えられ、学級担任の提案がうまくいったケースと思われる。

2. 事例2について

(1) 対象児

Bくん。小学部3年生。脳性まひ。

(2) 対象児の様子

- 「Aくん（事例1）は？」などと友だちの心配をよくする。
- Cちゃんのまねをして、麦茶を飲んでいる最中、うがいをして楽しんでいる。
- 服をひっぱったり、ぶったりしてかわりをもとうとする。
- 「Bくん」と呼んでも「シーン」と言ったり、わざと「やらない」と言ってみたりして、相手の様子をうかがったりする。
- 落ち着きがなく、じっとしてられない。
- 排尿は予告できる。
- 指しゃぶりをする癖があり、一旦しゃぶり出すと気になってしょうがない様子である。
- メガネをかけることを嫌がる。
- 数唱は10まで言えるが「かず」の認識はない。
- モノの名前は、ほぼ入っているが、「Cちゃん（事例3）」「Cちゃんでんき」と言ったりとり的な連想をすることがある。
- ビデオ・絵本等は苦手だが、出てくる擬態語等を聞いて楽しむことがある。

- 登校直後、「もう夜？」や授業中「これ終わったら何する？」など見通しが立たないと不安になりやすい。

(3) 連絡帳でのやりとりの概要

①学級担任からの提案

「他のクラスで『ことば遊び（例えば『あ』で思いつくものをいくつか言えるかなどの学習）』を行っているそうです。そこで、お子さんのことばをより着実にするための一環として、その学習に参加させていこうと思うのですがいかがでしょうか。」

②保護者からの回答

「他のクラスへの参加の件ですが参加させて下さい。先生が『こうしたら伸びる』とお思いのやり方にお任せします。よろしくお願いします。（ことばの）土台だけでも、しっかりしてくれればと思っています。」

③学級担任の経過報告

「『ことば遊び』は、例えば『あ』がつくことばを考えて空いている9マスに記入して、その後みんなでビンゴゲームをして遊ぶ活動なので、お子さんも楽しく活動しているようですよ。」

④保護者の報告

「『オレ、字（ことば）の勉強しているんだよ』と教えてくれます。このまま、学習が定着するといいのですが…」

⑤学級担任の回答

「お子さんは、ことばの学習に対して意欲をもって取り組んでいるようです。『オレはがんばっているんだぞ』ってご家族の皆さんにアピールしているようですね。ことばは、楽しみながら繰り返し使ったり、その場にあるものを連想したりしていくことで定着していくものです。ご家庭でも、時々『しりとり』などでお子さんと一緒に遊んではいかがでしょうか？」

⑥保護者からの要望

「この半年の学習内容等は、前籍校へ伝えていただけるのでしょうか？五十音を37、8も覚えたようですので、定着させたいのですが…」

⑦学級担任からの回答

「前籍校の方には、こちらでの学習状況の記録等をお伝えしておきますので、ご安心下さい。前籍校とも、今まで連絡は取り合っておりますし、今後も、連絡し合うようにしていくつもりです。退園後も何かご相談がありましたらご遠慮なく連絡を下さいね。」

(4) 考察

この事例は、学級担任が対象児の学習の様子から他のクラスでの学習を通して文字学習の定着を図ることを保護者に提案したケースである。他のクラスでの学習で五十音の大半を覚え、保護者は前籍校へこの学力の様子をしっかりと引き継いでほしいと要望をしている。

一連の経過を見ると、保護者は学級担任の提案を受け入れているが、これは「こと

ばへの土台を作ってほしい」という要望に叶うと考えたからであろう。対象児は五十音の大半を覚えるなど、他のクラスでの学習は効果的であったことがうかがえる。そのため、保護者はこの学力を維持したいと考え、前籍校への引き継ぎの確認をしてきたと思われる。このように、文字学習の定着といった学級担任の意図とことばへの土台作りを、と願う保護者の意図が一致したことが、五十音の大半を覚えるといった大きな成果につながったと考えられる。

3. 事例3について

(1) 対象児

Cさん。小学部1年生。脳性まひ。

(2) 対象児の様子

- 「ポチ」(犬)、「ニャー」(猫)は、絵本を見て指差することができる。Dくんのことには「たー」、自分のことは、「ひー」と呼んでいる。
- 「きをつけ」と言うのと「れい」と返してくるが、頭を下げる動作はしない。
- 「グー」と鼻を鳴らして寝たふりをして、「おはよう」と言うのと「おはよ」と返してきて、先生とのやりとりを楽しんでいる。
- 「ボー」(おなら)と言って楽しんでいる。
- 絵本(特に、動物に関する絵本)をめくるのが好きだが、自分で読むより、先生に読んでもらうことを好む。
- 「トイレ」は最初「イヤー」(いかない)と言っていたが、最近では出た後、もじもじし出して「トイレは？」の問いに「はい」と言うようになってきた。
- 簡単な指示は理解して行動できる。
- 自分で袖を通すことはできる。

(3) 連絡帳でのやりとりの概要

①保護者からの悩み

「本を読んでももらいたがるのですが、いつも同じ本(10冊位)ばかりをせがんでなかなか違う本になじめません。いろいろと興味が広がるとよいのですが…」

②学級担任の回答

「現在、学校では『ノンタンシリーズ』を読んでいます。お子さんがフツと親しみやすいことば(単語)や雰囲気が出てくるもの、または読み手が繰り返し出てくることばや行動をまねしたりすることで、子どもたちは興味を抱くことがあります。学校でも、この観点からできるだけたくさん本の読み聞かせを行っていきたいと思いますので、ご家庭でもぜひチャレンジしてみてください。」

③保護者からの質問

「家で読んだことのない本の話をしていたのですが、学校で読んだ本なののでしょうか?『ぐんぐんぐん』や『おおきなかぶ』、『おひやくしょうヤン(さん)』と言うのですが…」

④学級担任の回答

「現在、学校祭に向けて舞台発表に使う絵本の読み聞かせをしています。その絵本は、『ぐんぐんぐん』。お子さんが言ったように、農夫が様々な作物を育てて収穫していくお話です。徐々に、本のレパートリーの幅が広がったように思いませんか？」

⑤保護者からの意見

「確かにそう思います。これからも引き続き違う絵本を読み聞かせるようにします。今後も、よろしくお願いします。」

(4) 考察

この事例は、保護者から絵本など興味の幅を増やしたいといった相談のケースである。学級担任は、その学級の子も達が興味を示している絵本や学級での取り組みを伝えている。保護者はいつも決まった絵本ばかりではなくいろいろな絵本の読み聞かせが大切であることに気づいたようである。

一連の経過を見てみると、保護者は興味・関心の幅を広げたいとの思いがあり学級担任に相談していることがうかがえる。学級担任は、学校での取り組みの様子を伝えながら、ことばや行動を真似して楽しんでいる対象児の興味・関心の方向性を保護者に気付いてほしいと考えている。保護者は、対象児が家庭で話した内容から、子どもの興味・関心の幅が広がっていることに気づいたようである。このように、保護者からの相談に対して、学習の様子を伝えながら着実に興味・関心の幅が広がっていくことを保護者に気づいてもらいながら、学校と家庭と連携して進めていこうとすることがうかがえた。

IV. まとめ

各事例を通して見えてきたことは、保護者からの相談に対しては、保護者の意図を汲み取り、学校での指導体制をいかに的確に伝えながら、子どもへの変化を保護者と学級担任とで一緒に感じ取れるかが大切であろう。

また、学級担任の提案に対しては、なぜ、この方向が効果的なのかを具体的な子どもの様子を伝えながら学級担任と保護者との意図を確認し合いながら一緒に歩んでいく姿勢を伝えていくことが重要であろう。

今後は、学級担任と保護者との意図を一致させながら、子どもへの具体的な支援方法を提示していく連絡帳の活用を検討する必要がある。

文献

- 1) 安藤隆男 (2002) 障害児教育における授業研究の視点と方法. 肢体不自由教育, 156, 4-10.
- 2) 飯野順子 (2004) 肢体不自由教育への希求. ジアース教育新社.
- 3) 中島久美子 (2008) 家庭の育児力の形成—連絡帳による振り返りの効果—. 日本保育

学会第61回大会発表論文集，239.

- 4) 武蔵博文・高畑庄蔵（2003）知的障害生徒の問題行動に対する家庭・学校連携による支援—支援ツール「ほめたよ日記」を活用して—．特殊教育学研究，40（5），493-503.